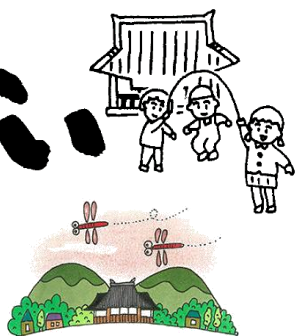


とくわい



2021 年 9 月 16 日 NO.615

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

東海教区 教化団体代表者紹介

各教化団体の代表者を順次紹介いたします



ともに聴聞（ききたい）
法味（あじわいたい）
いのちの つながり めくもりを
いのちの尊さ 輝きを
布教団 副団長 代表委員
山田 教尚（鈴鹿組存仁寺）

本派の教誨師として名古屋刑務所
に出かけさせていただいて 37 年
になりました。

体力的に今しばらく続けていき
たいと思っております。

本派矯正教化連盟

東海教区支部 副支部長

楠原 純孝（中勢組西向寺）



昨年から教区仏教壮年会連盟理事長を拝命
し、宗派では組織拡充委員になりました。
その中でもこの一年コロナ禍にあって、仏
壮の活動は自粛せざるを得ませんでした。
仏教壮年会は朋友の輪を拡げ既にある組織
の活動の充実と、新たな寺院仏壮の結成と
拡大に向け取り組んでいます。

仏教壮年会連盟 理事長

種村 美樹（員弁組源光寺）



四日市にある特別養護老人ホーム
でのビハーラ実践運動、33 年間で
初めての長期休会中。

コロナが落ち着いたら月例の活動
を再開します。

ビハーラ東海 代表世話人

佐々木 淳成（員弁組欣浄寺）



Contents

教化団体代表者紹介	P1
こころばなし	P2
声	P3
特集	P4.5
連研のススメ	P6.7
お坊さんの書棚	P8

『繋がり』

長崎 恵水（員弁組照光寺）

昨年より世界中で蔓延し続けるコロナウイルスで、経済的にも日常生活にも多大な影響があり、様々な変化をもたらしてきている現状があります。私たち寺院活動の体制も今日社会情勢の中での変化を余儀なくされています。葬儀や法事の状態も変わってきました。思えばコロナ禍以前から傾向はありましたが、法事は延期若しくは家族だけ、葬儀も家族、親族だけの参列という形が多くなりました。

先日、御門徒の葬儀のことでした。通夜式の前に施主が控室に来て「うちの長男（中2）が動揺しているのか母（亡くなられた方）の傍に近づかないんです。大丈夫でしょうか？」と尋ねられましたが「大丈夫です、今はそっとしておいてあげて下さい」としか言えませんでした。翌日、出棺の折、大声で「おばあちゃん」と御棺に泣き崩れる姿を見ました。大好きだったおばあちゃんの死を受止める瞬間でした。親族のみの葬儀でしたが、ゆっくり大切な時間が流れていった気がしました。

数年前から新聞・SNS等の広告に「小さなお葬式」とか「家族葬専用」の葬儀会館等を目にします。しかし、それらを一概に否定していくことは困難な時代と思われれます。このような状況の中「直葬」や、ついには「お坊さんのいないお葬式」（現在は活動終了）と銘打った葬儀業者も現れました。私たちは、そういった発想が生まれる今の社会情勢も考えていかなければならないと痛感します。



またコロナ禍で医療体制の逼迫が懸念され、家族の病院の出入りが難しいとか、身内の臨終に立ち会えなかったとの声が聞こえる中、昨今、在宅医療を利用する人が年々増えてきているそうです。在宅医療とは、通院が困難になったとき、かかりつけ医の訪問による診療や治療、処置などを受けながら自宅などの住み慣れた場所で病気の療養を行うことです。病状が安定していれば、自宅などの日常生活の場所においても入院している場合と同じような医療が受けられるそうです。

最近、御門徒でもこの医療を受けられる方が徐々に増えてきました。これはご家族の理解と負担が大きいと勝手に思いましたが、聞かせて頂くと、医師・看護師だけではなく、最近PA（フィジシャン・アシスタント）という人がいるそうです。医師の診療をサポートするとともに患者や家族に寄り添い、望みを聞き出して医療・介護事業者に取り次ぐ役割を担って頂けるそうです。

先日、その在宅医療をされていた御門徒が亡くなりました。自宅へ駆けつけベッドの上のお顔にふれたら、まだ温かくて「亡くなってすぐ連絡しました」とのことでした。ご家族が住職の私にも生前から逐一状態を伝えて相談くださることは、今まで少なかったような気がしました。

私たち僧侶は法を伝えることが本分であり、私たち僧侶の姿勢は、いつの時代でも、どんなに世の中が変わっても、変わることはない法によって、一人ひとりの悲しみ苦しみに寄り添い、時を共有出来る、葬儀、中陰、法事と繋がるご縁を通して、お伝えしていくことが大切だと感じました。

既に高齢化社会にあり、家族の形も多種多様の世の中になりつつあります。その中、福祉活動は益々重要になっていくと思います。宗門では以前から施設を中心としたビハーク活動は普及しつつありますが、門信徒（家族）に直接寄り添える形を何とか模索していく必要があると思います。私たち僧侶の姿勢は、いつの時代でも、一人ひとりの悲しみ苦しみに寄り添い、特に老・病・死の中で繋がるご縁を通して、おみりを、お伝えしていくことが大切だと感じました。

『出遇いの中で広がり、別れの中で深まる』

今年5月にふと思立って、蓮の苗を買ってきました。水と土をこね、蓮用の泥を作り、小さな苗を植えます。新芽は20センチほどの大きさでしたが、ある方から蓮用の肥料をいただいたおかげで、すくすくと成長し、開花が楽しみでした。7月のある日、待ちに待った瞬間が来ました。開花です。お楽しみ蓮を買ったので、開花するまでどんな蓮の花が咲くのかわかりませんでした。きれいな白蓮華が開花していました。うまく咲いてくれてよかったという嬉しさもつかの間で、その4日後には儚くも散ってゆきました。

花の儚さを感じると同時に、蓮如上人の「白骨のお手紙」の「朝には紅顔あって夕べは白骨となれる身なり（朝には元気な顔であっても、夕べに死すかもしれない、いつのち終えるかわからない私たちであります）」という言葉がふと浮かんできました。

わが命もひとたび無常の風が吹いたなら、有無を言えず終えていくのちであったと、散りゆく蓮の花に教えられたことであります。別れの中に大切な教えがありました。



つぼみが花開くように、出遇いの中で人生の幅は広げられ、花が散り、実が結び、味が深まるように、別れの中で人生の味わいが深まってくると聞かせていただきます。

嬉しい出遇いがあれば、また厳しい別れもあります。出遇い、別れ、一つ一つの営みの中に、お念仏のお育てがあったと思うことでした。

『想いは伝わる』

新型コロナウイルス感染症が世界において拡大し、未だに収束の見通しが立たない不安な状況を日々過ごしていることであります。日本においても多くの感染が確認され、気がぬけない状況が続いています。

今年のお盆参りは寂しいことがありました。毎年お参りをさせていただくお家でのことでした。いつもなら玄関を開けて入ろうとすると、「お兄ちゃん！こんにちは！」と、勢いよく扉の前まで来て呼んでくれる男の子がいたはずなのに、今年はそこに男の子の姿はありませんでした。どうしたんだろうと思い、ご家族に尋ねてみますと、「普段は遠方に住んでいて、いつもならお盆参りのためにこっちへ来るんだけど、コロナ禍で来たくても来られないんだ。本人も

お兄ちゃんに会いたがっていましたよ」と、言われました。



毎年その男の子と会うのを楽しみにしていたのにコロナ禍によって会うことができない。私もとても寂しいことであります。

ですが、その男の子の気持ちを知ることができ心がほっこりしました。コロナ禍で会えなくても私のことを想っていてくれる、それは大変有難さを感じました。

今回男の子とは実際に会えていなかったけど、ご家族を通して男の子の想いを受けとることができました。

「想いは伝わる」この言葉が私は好きです。

～田島希世弘 金城六華園施設長インタビュー～

本年4月、金城六華園の施設長に就任された田島希世弘さんに、施設長としての思いやコロナ禍の金城六華園での生活についてお話を聞かせていただきました。

—まずは、施設長ご自身について教えてください。どのようなきっかけから金城六華園で働き始めたのでしょうか？

おもちゃ屋さんで仕事をしていた時期があり、その時に子どもと触れ合う仕事っていいなあ、と思い始めました。その後、保育の専門学校を卒業しましたが、当時は男性が保育園に就職する事態が珍しかったです。その中で金城六華園が職員募集しているということを知らせていただき、1999年の9月に就職しました。



—金城六華園で働いて20年以上になるのですね。児童養護施設で働く喜びを教えてください。

子どもと向き合ったときに子どもが返してくれるのが嬉しいです。金城六華園を卒園した子どもが顔を出して話をしてくれたり、自分の誕生日を子どもたちが祝ってくれたり、といったことが節目節目にありました。

—一方で大変なことも多いと思いますがいかがでしょうか？

何度指導しても同じ失敗を繰り返す子がいると、どう指導すべきか悩んでしんどいですね。ただ、どの言葉で指導が聞こえなくなったのか、次はどう指導するか考える中で指導の引き出しが増えてきました。

—4月より施設長に就任されましたが、これまでと仕事は変わりましたか？

施設の運営に関する部分の仕事が増えました。30人ほどいる職員へ働く上での心配事や悩みがないかといった聞き取りや、施設の金銭面での管理や運営手続きについても改めて勉強しています。また、名古屋市内の児童養護施設の施設長の集まりがあるので、その業務も担っています。それから、入所児童のやんちゃが過ぎたときには個別に指導にあたることもあります。なんでも屋さんですね(笑)

—現場とマネジメントと両方の仕事があるのは大変ですね。

これまで現場の仕事が多かったので、そこから離れると寂しさもあります。それに、子どもたちのことを知るのが全ての基本なので、土日や夏休みなどの期間に食事を一緒に取ったりしています。

—コロナ禍での園内の対応は何かされていますか？

感染予防対策は当然として、感染者が出た場合のフローチャートを作りました。他の児童養護施設で感染者が出た時の対応を参考にして、隔離・連絡など具体的にどうすればいいか全職員が分かる様に準備しました。

—集団で生活する場ですし、本当に大変ですね。

それから外泊や外出に制限をした際は、子どもだけでなく保護者のストレスも大きかったです。

一週末や夏休みなどは園を出て保護者と過ごす子どももいるんですね。

去年の春ごろは「いつになったら子どもと会えるんですか？」と聞かれても、こちらもはっきりとした時期が伝えられず子ども、保護者、職員の皆の神経がとがっていき大変でした。

一他にもありますか？

スポーツ観戦など招待の行事がほとんど無くなりました。子どもが外で発散することが減ったので、職員が考えて園内でできる行事を増やしています。

これまでに行った園内行事（一例）

- ・花火大会
- ・スイカ割り
- ・クレープ屋
- ・ゲームセンター
- ・映画鑑賞など



一社会全体もそうですが、園での生活もこれまでになく大変な部分もありますね。そんな時期だからこそ支援をしたいという人もいますが、こんな支援が嬉しいということはありませんか？

どんな支援も有り難いですが、先ほどお話しした園内行事のために頂戴した寄付金を使わせてもらったことがあります。物品の寄付の場合でも、それを使って園の皆でどんな風に過ごせるか考えたいと思います。



一金城六華園を今後こんな施設にしたい、もしくはこんな施設長になりたいという目標はありますか？

招待行事などが無くなった時に、外に頼り過ぎていたかもしれない、と感じました。また、それは同時に園で過ごす中に沢山の支援があったことにも気づかされました。子どもたちだけでなく私も含めて職員も、そのことに感謝できるようになりたいと思っています。子どもたちが一つ一つを覚えることはないと思いますが、寄付を頂いて行事をしたときなどには、どなたから寄付があったか園児には伝えるようにしています。

一今日はありがとうございました。

コロナ禍の大変な時期にたくさんの方からの温かいお言葉・ご支援をいただき、職員・子どもたちは励みになっております。お心遣いありがとうございます。

金城六華園へのご支援は↓

◆ゆうちょ銀行◆

口座記号 00870-5

口座番号 6038

加入者名 名古屋市中区門前町1番23号
福祉とうかい

※振込または直納をお願いしております。
振込用紙をご希望の方は担当（富永）までご連絡ください。

『環境・格差・貧困などの社会問題は、 宗教が入り込む問題ではない と思いますが』

松原 大致（員弁組光明寺）

サブテーマ

- ・私たちが取り組める環境問題（地球温暖化や核物質の拡散など）には、どんなことがありますか。
- ・子どもの貧困について、私に何ができるのでしょうか。
- ・快適な生活が続けるためには、原発もやむを得ないという人がいます。どう考えたらよいのでしょうか。
- ・社会のさまざまな問題は、私一人の力では解決できないのでは。

カラフルな紙製の募金箱をご覧になりましたか？「子どもたちの笑顔のため」と書かれています。わたしたち本願寺教団は貧困に苦しむ子どもの支援のため3年前から募金を開設しています。また、ご門主が会長を務める全日本仏教会は「環境・格差・貧困などの社会問題」等の解決を目指すSDGs（持続可能な開発目標）を推進しています。ですので、とくに僧侶や寺族の皆様は、本テーマが宗教や浄土真宗のみ教えと無関係だとは思われないかもしれません。そもそも生まれに起因する格差や貧困は古くて新しい懸案です。これは釈尊がカースト制度を問うたことから明らかにしょう。

しかしながら、いざ実践となると大変です。というのも、具体的な事象や人と出会わなければ、最初の一步がなかなか踏み出せないからです。たとえば2018年のある調査によれば、日本は子どもの7人に1人が相対的貧困にあるそうです。なお、相対的貧困とは《その国や地域の水準の中で比較して大多数よりも貧しい状態のこと》を指します。しかし、このニュースを肌で感じている方は稀ではないでしょうか。何より困ったことに、わたし自身が子どもの貧困という現実をほぼ実感していません。実体験に乏しいからでしょう。



ですが、拙寺の活動を通して地域の実情を教えていただく機会がありました。拙寺では約20年前から連研方式の法座を毎年開催しておりまして、同じテーマを話し合った経験があります。学ぶことは多いものです。たとえば、拙寺の門徒推進員さんは地元の民生委員や保護司を務めています。教職のご門徒さんもおられます。そこでお聞きしたところ、ここ数年で子どもを中心とした相対的貧困が水面下で進行している現実をいくつも教えていただきました。また、近年わたし自身も地域社会のなかであるボランティア活動をしています。そのなかで関わった若者が貧困状態にあることを初めて知らされました。いったん貧困状態に陥ると、抜け出す機会が少ないことも大きな課題です。

このような経緯があって格差・貧困の問題に関わろうと思うに至り、拙寺では門徒推進員さんを中心として「おてら子ども食堂」の立ち上げを企画しました。（ただし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で現在は中断しております）いなべ市内における民間の活動団体はもちろん、東海教区のお寺に先行事例があるのも心強い味方です。

振り返ってみれば、このテーマはまず自分自身の肌感覚として問題と関わることが挙足一歩だったのです。このことをご門徒さんから教わりました。話し合い法座がその一助、突破口となったように思います。そして、苦悩を抱える当事者と出会い、関わり続けることが、他人事を自分事へと昇華させるのではないのでしょうか。

わたしたちの歩みはまだスタートラインに立ったばかりです。この先には到底一人では乗り切れない様々な困難があるでしょう。ですから、どうかあなたの力を貸して欲しいのです。共にこの問題に取り組んでいきませんか。

『戦争をなくし、平和を築きあげる にはどうしたらよいですか』

麻布 明德（中勢組善福寺）

サブテーマ

- ・ 宗門は、戦争を再び繰り返してはならないという決意を確認するため、「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」をお勤めしています。この願いをどう受け止めるべきでしょうか。
- ・ 国のために、愛するものを守るために戦死された方を、靖国神社に祀るのは当然だと思いますが。
- ・ テロや武力紛争が絶えませんが、平和を壊す宗教もあるのではないのでしょうか。

今年も 6 月 23 日（沖縄戦終結の日）、8 月 6 日（広島への原爆投下の日）、8 月 9 日（長崎への原爆投下の日）、8 月 15 日（終戦の日）、9 月 18 日（満州事変の発端である柳条湖事件の日・千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要の日）など忘れてはならない日がやってきました。日常生活の忙しさのなか忘れてしまいがちな私たちも、せめてこの時期は戦争のこと平和のことを考えていく大切な期間にしたいと思います。

数年前まで夏になると毎年のようにアニメ映画「火垂るの墓」が放映されていました。見たことがある方もたくさんおられるでしょう。野坂昭如原作。太平洋戦争末期、父親が海軍軍人で出兵。空襲で母親を失った兄と妹が、過酷な暮らしの中で必死に生きようとしますが、悲劇の死を迎えてしまいます。

この名作とも言われる「火垂るの墓」を監督したのが、スタジオジブリの高畑勲さんです。映画の公開後、反戦映画とされてきたこの作品を、高畑さんは繰り返し「反戦映画ではないし、なり得ない」と主張していました。自身の著作のなかで「そういった（悲惨な）体験をいくら語ってみても、将来の戦争を防ぐためには大して役に立たないだろう、というのが私の考えです」「戦争末期の負け戦の果てに、自分たちが受けた悲惨な体験を語っても、これから突入していくかもしれない戦争を防止することにはならないだろう、と私は思います。やはり、もっと学ばなければならないのは、そうなる前のこと、どうして戦争を始めてしまったのか、であり、どうしたら始めないで済むのか、そしていったん始まってしまったあと、為政者は、国民は、いったいどう振る舞ったのか、なのではないのでしょうか」

2015年の神奈川新聞の記事でも「日本では平和教育にアニメが用いられた。もちろん大きな意義があったが、こうした作品が反戦につながり得るかという、私は懐疑的です。攻め込まれてひどい目に遭った経験をいくら伝えても、これからの戦争を止める力にはなりにくいのではないか」「なぜか。為政者が次なる戦争を始める時は『そういう目に遭わないために戦争をするのだ』と言うに決まっているからです。自衛のための戦争だ、と。惨禍を繰り返したくないという切実な思いを利用し、感情に訴えかけてくる」

高畑監督の言葉は、被害者の視点で戦争の悲惨さを伝えることは大切ではあるが本当の「反戦」とは言えず、戦争を食い止める力にはならないのではないかと、との重い指摘です。悲惨さを語るとともに、戦争を起こした過ちを見つめ直すことの重要性を説いてくださったのでしょうか。

コロナ禍のなかで、罹患者や医療従事者などへの差別が発生しました。差別は決して許されることではありませんが、感染したくない、周りを守りたいとの強い思いが外を向き、攻撃的に他を排除してしまった結果なのでしょう。そんな人間の在り方は高畑監督の指摘と重なって見ると言えば強引でしょうか。一人ひとりの持つ不安や恐怖が集団のなかで増幅され他への攻撃に繋がらないよう、自分の意識だけでなく社会の状況も注視していくことも大切なのです。

「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

今一度、法句経のこの言葉を深く心に刻んでいきたいと思います。「己が身をひきくらべる」ことを忘れず、私自身が被害者になることを怖がるだけでなく、加害者になること、誰かを加害者にしてしまうこともしてはならない。そのために、できることは、学び続けること、言葉にしていくこと。できることから一歩でもはじめてみましょう。

『52 ヘルツのクジラたち』

著：町田そのこ 発行：中央公論社

この作品は「2021 年本屋大賞」受賞作なので気になっている方、すでに読まれた方も多いかもしれません。タイトルの「52 ヘルツのクジラ」とは通常の鳴き声より遥かに高い周波数で鳴くクジラのこと、他のクジラはその声を聞き取れないといわれています。独特の声質なので仲間のクジラとのコミュニケーションがうまく取れない。それゆえそのクジラは「世界でもっとも孤独なクジラ」と呼ばれています。

本作は登場人物を「52 ヘルツのクジラ」になぞらえて、その抱える孤独を表現しています。虐待をしてしまう親、そしてそれを受ける子供、生きづらさを感じる人、老いの恐怖…。「助けてほしい」「わかってほしい」しかしその声は「52 ヘルツ」であるため周りの人たちには聞こえません。作中の虐待の描写などたいへん心が痛みます。

こんな話はフィクションであってほしい、しかし現実社会では同じような虐待が行われているのです。また、様々な理由から生きづらさを感じている人が多数いるのだということを考えさせられます。何気なく過ごしては「52 ヘルツ」の声は私に届きません。だからこそ自分から周波数を合わせて聴きに行く（行動をする）ことが大切だということに気づかされます。

読み進めるうちにドンドン引き込まれます。感情移入をして憤りを感じることも多いです。しかしじっくり読みたい作品です。



『取材・執筆・推敲 書く人の教科書』

著：古賀史健 発行：ダイヤモンド社

「嫌われる勇気」の古賀史健さんがライターのために書いた「書く人の為の教科書」。プロローグで、「ライターとはそもそもどんな人のことなのか」と問うところから開かれていきます。

字面で見るとライターは「書く人」だろうと感じます。しかし、映画監督は「映画を撮る人」なのかといえば、監督本人が撮ることはほとんどありません。撮影や照明や編集など大部分は他の人の仕事です。監督は映画を「つくる人」といえます。

それと同様に、ライターもただ書くのではなく、読み手がワクワクしたり、読み進めたいような文章をつくる人であるという視点での「教科書」として展開しています。

タイトルの通り、本書は「取材」「執筆」「推敲」の三部構成になっています。著者の経験や感覚をもとに、インタビューの時の事前準備や心得、章の構成の建て方、推敲するときの覚悟などが説かれています。

ここまでの気持ちで取り組めないという人も多いと思いますが、書き物をする人の覚悟が伝わってきます。

「書く人」のみならず、人前で話したり、伝えることに関わる全ての人にとって、とても刺激的な一冊です。

